野田キャンパス英語科目に対する満足度

東京理科大学 教養教育研究院
野田キャンパス教養部 准教授　安田（やすだ）　利典（としのり）

東京理科大学 教養教育研究院
野田キャンパス教養部 准教授　半沢（はんざわ）　蛍子（けいこ）

本特集では，英語教育に関する主要な学術理論，および野田キャンパスでの教育実践について述べてきました．最後に，同キャンパスで開講されている英語科目に対して，受講者がどの程度満足感を得ているかについてデータをもとに論じていきます．

1．満足度を調べる意義と注意事項

人は，人生のあらゆる側面に対して満足／不満足を感じながら生きています．これは人間の本能として自然なことであり，同様に，自分が受けた教育や授業に対しても満足／不満足を抱きます．そしてそれは，当該科目を評価する上で重要な指標の 1 つとなります．まず本節では，満足度を調べる意義と注意事項について説明します．これらを理解しつつ，今回の調査結果を読み進めていただければ幸いです．

【意義 1：個人の多様な考えを把握できる】

満足度調査と聞いて，皆さんはどのような調査を思い浮かべますか？「あなたはこの科目にどのくらい満足していますか？」という質問に「1：全く満足していない」～「4：非常に満足している」から 1 つを選んで回答するスタイルでしょうか．こうした調査は簡易的で利便性が高く，多くの教育機関で導入されています．

しかしこの方法では，満足度という数値は得られても，上記 4 つの選択肢から 1 つを選ぶに至る，個々人の多様な背景までは分かりません．例えば，ある英語科目で TOEIC® Listening & Reading Test 860 点の取得を目標に設定しているとします．仮にこの目標を達成しても，ある履修者はより高いスコアを目指していたために満足していないかもしれませんし，別の履修者は教員と折り合いが悪かったという点で不満を残している可能性があります．逆に，今回は 860 点に到達できなかったとしても，将来のスコアアップにつながる効果的な学習方法を学べた場合には，当該科目に対する満足度は高いかもしれません．

このように，満足度は個々人の多様な思いを大切にしているところに本質があります．だからこそ，多人数で同じ授業を受ける学校教育場面において，重要な指標の 1 つになるのです．したがって，こうした側面を調査に反映していく必要があります．

【意義 2：不満を分析して改善につなげられる】

満足度調査では，満足した側面だけでなく，不満を感じた部分にも焦点を当てることが重要です．教員も人間である以上，自分だけでは気づけない改善点がどうしても存在します．また，前述のように，満足度が個人の多様な背景に基づくことを考えれば，思いもよらぬところから改善点を指摘されるかもしれません．こうした不満を真摯に分析すればこそ，授業改善に向けた方向性がより明確に見えてきます．

【注意事項 1：満足度と英語力は別の概念である】

満足度調査では注意すべき点もあります．まず，満足度の高さと英語力の向上は（お互いが相関していることを前提としつつも）分けて考えるべきです．例えば，教員の人柄も良く，楽しい授業で満足度が高くても，それが英語力向上の証明になるとは限りません．逆に，英語力は劇的に伸びたものの，膨大な時間と労力を割いたことで，満足度はあまり高くない場合もあるでしょう．本稿ではあくまで満足度のみを取り上げていますが，車の両輪として英語力向上も併せて考えるべきだと言えます．言い換えれば，履修者の満足度を高めるためだけに授業を変えるのはときに悪手です．英語力向上のためには，英語教育の専門家が，場合によっては満足度を多少犠牲にしてでも，学術的知見に基づいて授業を策定する必要があると言えるでしょう．

【注意事項 2：科学的調査が必要である】

ここまでで述べたように，満足度調査と一言で言っても，背景にある個人的理由，改善すべき点の抽出，英語力との区別など，考慮すべきことは複数あります．これは，より広く見れば「知りたいことを正確に知る」という調査の科学性につながる部分であり，より精緻な調査のために考えるべきことはさらに多岐に渡ります．

例えば，上記の例にある，4 つの中から 1 つを選ぶスタイルの場合，選択肢の数は 4 つが最適なのでしょうか．「1：全く満足していない」や「4：非常に満足している」といった両極の回答は心理的に忌避され

る可能性もあり（Vaerenbergh & Thomas, 2013），そうした理由で「2」や「3」に集中した回答は，真の満足度を反映していないかもしれません．また，対象となる母集団が 1,500 名である場合，20〜30 名程度の回答数では，全体の満足度を正確に示しているとは言えないでしょう．加えて，調査への参加が任意である場合，主に不満を持っている履修者が（不満を述べたいがゆえに）回答を行い，結果が歪む可能性があります．さらに，既述のとおり「どのくらい満足しているか」を数値で尋ねるだけでなく，その多様な理由を書き込むための自由記述による回答欄も設けたほうがいいでしょう．その場合，これらの回答を適切に解釈するために，分析方法に工夫を凝らす必要があります．

こうしたことが考慮されて初めて，満足度が科学的に実証されたことになります．本稿では，このような実証性に留意しつつ調査を行い，結果を考察します．

2. 野田キャンパスにおける満足度調査

【方法】

［対象となる英語科目］

英語には，読む，書く，聴く，話すの 4 技能があります．野田キャンパスでは，4 技能を満遍なく伸ばすコア系科目 4 つ，および聴く＋話すのように特定技能に焦点化したスキル系科目 4 つの合計 8 科目を履修するのが一般的です．本稿では，調査参加者の 4 技能間での得意／不得意が満足度に反映されないように，コア系科目 4 つを調査対象としました．各科目の受講者は教室ごとに 20〜30 名程度であり，便宜的に各々を標準的な履修時期で呼ぶことにします（1 年生前期，1 年生後期，2 年生前期，2 年生後期）．

［参加者（回答者）］

参加者（回答者）は，野田キャンパスで 2021 年度後期に英語科目を履修した学生です．十分な数の学生から回答を得るべく授業の一環として実施し，同時に履修者の学習に影響が出ないよう実施方法に留意しました．結果，理工学部 9 学科，薬学部 2 学科（いずれも 2021 年度当時）の 499 名から回答を得ました．

［実施方法］

実施時期は 2021 年 12 月〜2022 年 1 月であり，新型コロナウィルスの流行と重複していた関係で，オンライン形式と対面形式の授業が混在した状態でした．

本稿の執筆者 2 名が，アンケート調査を作成するためのシステム（Qualtrics）を用いて調査フォームを作成し，回答者は，それを用いてオンライン上で自分のペースに合わせて回答することが可能でした．

「回答により個人に不利益は生じないこと」「個人情報の使用範囲」などを説明し，全回答者から同意を得ました．また，回答者の率直な意見を的確に収集すべく，「回答に正答や誤答はない」「入力キーボード付きデバイスでの回答が望ましい」旨を説明しました．

回答者は，自身が受講したことのある全ての英語科目について，下記の項目への回答を求められました．

- 授業に対する満足度：0〜100（1 点刻み：選択式）
- 受講方式（対面，オンラインなど：選択式）
- 満足している点（自由記述式）
- 改善すべき点（どのような点が改善されれば，より満足すると思うか：自由記述式）

自由記述での回答については，必要十分な意見を収集する目的で，「思いつく限りたくさん」かつ「具体的に」書くよう指示し，特定の回答を誘導しないよう留意しつつ内容や書き方を例示しました．

［分析方法］

本稿では以下 2 つの観点から分析を行いました．

（1）各科目における満足度の平均

各科目ごとに「授業に対する満足度（0〜100）」の平均と標準偏差を算出し，全体の傾向を分析しました．

（2）満足している点／改善すべき点の分析

（1）による数値としての傾向に加え，自由記述による多様な意見を分析し，具体的にどのような点に満足し，改善を求めているかを以下の段階を経て分析しました．

(i) コードの付与：得られた自由記述から回答者の主張内容を吟味して抽出し，コードを付与します．**【表 1】**の例にあるように，1 つの回答に対して複数のコードが付与されることもあります．

(ii) コード－カテゴリ対応表の作成：(i) で付与されたコードの一部を分析し，残りの全コードに適用可能なカテゴリを抽出し，対応表としてまとめます（Braun & Clarke, 2021）．その際，満足している点と改善すべき点に分け，「学生の声」としての回答者の主観的意見を重視する方法をとりました．例えば，「課題が英語力向上に役立った」「4 技能がバランスよく身についた」「授業が全て英語でいいトレーニングになった」等のコードの共通項から類推し，学生が満足している点として「英語力が向上する」というカテゴリが作られました．一方で「対話練習があっても，日本語や雰囲気で伝わってしまった」「英語ができるようになったと感じられる授業だと嬉しい」等のコードの共通項から，学生が改善を求めている点としての「英語力向上にならない」というカテゴリが作られま

した．カテゴリ数は，満足している点で 94 種類，改善すべき点で 100 種類，無効回答が 3 種類の合計 197 種類となりました．

(iii) カテゴリの付与

回答から得られた全てのコードに対して，上記 197 のカテゴリからどれか 1 つを付与しました．これにより，多種多様な意見，書き方によって得られた自由記述の回答データが，197 のカテゴリ（のいずれか）に集約されて表象されることになります【表 1】．

この例では、回答者Aの自由記述が、簡潔に表現された 2 種類のカテゴリに集約されている。

回答者	自由記述による回答	コード	カテゴリ
A	英語でグループワークを行うので、いろいろな人と意見交換ができて楽しかったし、その中で英語力も身についていったので良かった。	英語でのグループワークを通して、いろいろな人と意見交換ができて楽しかった	学生同士で交流する機会がある
		英語でのグループワークを通していろいろな人と意見交換をする中で、英語力が身についていった	英語力が向上する
	：	：	：
D	課題の中で英作文があったため、語彙の知識が増えたり、文法の復習になったりと様々な英語力の向上に繋がった。	英作文を通して、語彙の知識や文法の復習など、様々な英語力の向上に繋がった	英語力が向上する

1つの回答に対して複数のコードが付与されることもある。

他の回答者（D）の自由記述に対して、同じカテゴリが付与された例。このようにして、各回答者の多様な自由記述が決まったカテゴリで表象されていく。

【表 1】自由記述による回答，コード，カテゴリの例

【結果と考察】

(1) 各科目における満足度の平均

【表 2】は，本稿で分析対象とした 4 つの英語科目における有効回答数，および満足度（0〜100）の平均と標準偏差を示したものです．

この結果をどう解釈すべきでしょうか．数値だけ見れば，60〜70 点台ですので「合格点少し上」くらいの印象かもしれません．しかし，この考察には回答者の置かれた文脈，すなわち東京理科大学の学生であることを考慮する必要があります．

まず，本学の学生ですので，英語は専門ではありません．あまつさえ英語が苦手な学生も多く，「英語は嫌い」と公言する者も少なくありません（執筆者＝英語教員から見れば，彼女／彼らは苦手意識が強いだけで決して出来ないわけではないのですが）．よって，大学入学以前から，英語に対するやる気，学習経験，成功体験が不足している可能性があります．しかし，本学では英語科目の履修が全学生に求められています．また，英語以外の専門・教養科目の内容も厚く，その分授業や課題の負担が大きく，英語科目でさらにその負担が増える傾向にあります．こうした要因が英語科目に対する満足度を抑制する可能性を考えると，【表 2】の数値は決して低いとは言えず，回答者がこれらの英語科目に対して一定の満足度を示していると解釈できます．一方で，本学の学生の特性（英語の必要性を強く感じている，高校までで学習習慣が出来上がっているため苦手科目でもしっかり取り組める）が，数値に恩恵的に加点を与えている可能性は否定できません．

科目名	有効回答数	平均	標準偏差
1年生前期	398	63.65	23.91
1年生後期	394	71.22	21.26
2年生前期	172	62.75	22.94
2年生後期	168	70.88	18.60

【表 2】満足度の平均および標準偏差

(2) 満足している点／改善すべき点の分析

次に，自由記述のデータに基づき，満足している点／改善すべき点について考察します．これにより，数値で示される満足度の背景にある多様性を，より精緻に推測することができます．

前述のとおり，全てのコードに対してカテゴリが付されており，【表 3】は，各科目で抽出されたコード数と，それに付与されたカテゴリの数です．1 人の自由記述回答に複数のコードが付くこともあるため，コード数が回答者数を超えている箇所もあります．例えば，1 年生前期科目の満足している点では，合計 540 のコードが付与され，それらが満足を示す全 94 種類のカテゴリのうち 71 種類で表象されていることを意味します．

次に，各科目におけるカテゴリのうち「覚えていない」等の無効カテゴリを除外し，出現頻度が高かったものを順に 5 種類提示したのが【表 4】（満足している点）と【表 5】（改善すべき点）です．各表の数値は出現頻度，および説明率を示しています．例えば，1 年生後期科目の満足している点では，84 種のカテゴリのうち【表 4】に示す 5 種類の出現頻度が最も高く，理論上の最大値 592 に対して 5 種類の合計で 146 のコードに付与されており，説明率は 24.66% となります．ここでは，各表に基づき，複数の科目間に共通するカテゴリ（色付きセル），および単一の科目にのみ見

科目名		コード数	カテゴリ数 *
1年生前期	満足している点	540	71 (3)
	改善すべき点	441	70 (3)
1年生後期	満足している点	592	84 (3)
	改善すべき点	448	81 (3)
2年生前期	満足している点	242	60 (3)
	改善すべき点	208	59 (3)
2年生後期	満足している点	268	60 (3)
	改善すべき点	189	45 (3)

* (　) 内は無効回答扱いとなるカテゴリの数
例：「覚えていない」など

【表 3】満足している点／改善すべき点のコード数とカテゴリ数

られるカテゴリ（白いセル）について考察していきます．

【表 4】を見ると，「英語力（もしくはライティング力・スピーキング力）が向上する」が，全ての科目に共通しています．また「解説が分かりやすい」「学生同士で交流する機会がある」が３科目で共通しており，「英語の学習方法を学べる」「授業の進め方が適切である」「授業で扱うトピックが面白い」は２科目で共通しています．この結果は，野田キャンパスの英語科目において，これらのカテゴリで示される点に満足を感じている学生が一定数いることを示しています．

一方で，「オンライン授業なので，時間や場所に縛られずに受講できる」「課題（宿題）の量が少なく，負担が小さい」は１年生前期科目にのみ見られるカテゴリであり，しかも出現頻度が高く，上位を占めています．解釈は難しいですが，この調査自体は新型コロナウィルス流行時に行われているため，その時期の新入生の不安を反映した（不安の解消に役立ったため満足している点として挙がっている）ものかもしれません．

同様に，【表 5】の改善すべき点では，「課題（宿題）の量が多い」「授業の進め方が不適切である」は４科目全てに共通して見られています．次いで「課題に関する指示・連絡が不適切である」「試験の形式が不適切である」「学生のやる気を下げる要素が含まれる」が２科目に共通しています．上述の「授業の進め方が不適切である」については，教員側が積極的に対策を行うべきでしょう．しかし，英語習得のためには厳しい授業を行わざるを得ない面もあり，その意味で「課題（宿題）の量が多い」の解釈には注意が必要です．単に課題（宿題）を減らすのではなく，学生と教員の合意のもとで適切な課題量を提示していく必要があると思われます．

ところで，満足している点と比較して，改善すべき点では単一の科目にしか現れていないカテゴリ（白いセル）が多い傾向にあります．改善すべき点については，学生間での意見がより多様であることを示している可能性があり，不満解消のためには，各学生の個別のニーズに配慮する必要が高いのかもしれません．

1年生前期		1年生後期		2年生前期		2年生後期	
カテゴリ	頻度	カテゴリ	頻度	カテゴリ	頻度	カテゴリ	頻度
オンライン授業なので、時間や場所に縛られずに受講できる	26	英語力が向上する	40	解説が分かりやすい	10	英語力が向上する	18
課題（宿題）の量が少なく、負担が小さい	24	英語の学習方法を学べる	32	英語力が向上する	9	英語の学習方法を学べる	17
英語力が向上する	23	解説が分かりやすい	29	学生同士で交流する機会がある	9	授業の進め方が適切である	14
授業で扱うトピックが面白い	21	学生同士で交流する機会がある	24	スピーキング力が向上する	8	解説が分かりやすい	13
ライティング力が向上する	17	授業の進め方が適切である	21	授業で扱うトピックが面白い	8	学生同士で交流する機会がある	12
合計	111		146		44		74
説明率（%）	20.56		24.66		18.18		27.61

【表 4】各対象科目における出現頻度の高いカテゴリ（満足している点）

1年生前期		1年生後期		2年生前期		2年生後期	
カテゴリ	頻度	カテゴリ	頻度	カテゴリ	頻度	カテゴリ	頻度
教員から適切なフィードバックがない	29	課題（宿題）の量が多い	28	課題に関する指示・連絡が不適切である	19	課題（宿題）の量が多い	18
授業の進め方が不適切である	20	授業の進め方が不適切である	16	課題（宿題）の量が多い	14	試験の形式が不適切である	14
課題（宿題）の量が多い	18	課題に関する指示・連絡が不適切である	15	教員がオンライン授業用ツールの扱いに不慣れである	7	授業の進め方が不適切である	11
学生のやる気を下げる要素が含まれる	15	試験の形式が不適切である	14	授業の進め方が不適切である	7	学生のやる気を下げる要素が含まれる	9
授業の内容が簡単すぎる	14	教材や教科書の内容（量、種類、提示方法など）が不適切である	14	解説が分かりにくい	6	試験が難しすぎる	8
合計	96		87		53		60
説明率（%）	21.77		19.42		25.48		31.75

【表 5】各対象科目における出現頻度の高いカテゴリ（改善すべき点）

3. まとめ

本稿は，野田キャンパスの英語科目に対して学生が相応の満足感を得ていることを実証しています．これは，多人数に対する一斉授業の中でも，満足度という各学生に固有で多様なニーズが満たされていることを意味しています．また，その中でも一定数の学生が英語力の向上を実感しており，かつ英語力向上に関する不満が上位に挙がっていない点は，冒頭で述べた英語力と満足度の両者が適切に向上している証左の一端と言えるかもしれません．こうした点で，東京理科大学の学生，あるいは入学を検討している皆さまに安心材料を提供できる結果と言えるでしょう．一方で，改善が必要な点も明らかになりましたし，英語力の向上を直接的に示す指標と併せた調査結果も必要です．よりよい英語教育を提供していけるよう，東京理科大学の教員一同，これからも尽力していく所存です．

[参考文献]

1）Braun, V., & Clarke, V.（2021）. One size fits all? What counts as quality practice in（reflexive）thematic analysis? *Qualitative Research in Psychology, 18*(3), 328–352.

2）Vaerenbergh, Y. V., & Thomas, T. D.（2013）. Response styles in survey research : A literature review of antecedents, consequences, and remedies. *International Journal of Public Opinion Research, 25*(2), 195–217.